

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

科目ナンバリング コード	PGS3013101	授業科目名	ポピュラー音楽史			開講曜日・講時	水曜 3 限		
担当教員名	安田 昌弘	授業区分		開講年度	2020 年度	開講学期	前期	授業形態 種別	講義
科目ナンバリングの説明 ページへのリンク	<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering</a>			ディプロマポリシー (DP) の説明ページへのリンク	<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix</a>				
サブタイトル									
音楽表現を成立させている社会関係を紐解こう!									
授業の目的・到達目標									
音楽ジャンルとその背景にあたる歴史的知識とを関連づけて理解できる 音楽における産業やメディアなど社会的側面の重要性を説明できる 音楽の作り手と聴き手の関係について説明できる 音楽に関する自分の好みについて、社会的側面からとらえなおすことができる									
授業の概要									
『ポピュラー音楽史』では、日本のポピュラー音楽の変遷を、西洋、とくに英米の音楽文化のとの接触とその取り込みという視座から紐解いてゆく。普段当たり前前に聴いている「J-POP」の端々に透けて聴こえる洋楽の影響に意識を向け、それがもはや異国の音楽とは意識されないほど「J」なポピュラー音楽になっていることの含意を一緒に探求したい。『ポピュラー音楽史』では、日本のポピュラー音楽の変遷を、西洋、とくに英米の音楽文化のとの接触とその取り込みという視座から紐解いてゆく。普段当たり前前に聴いている「J-POP」の端々に透けて聴こえる洋楽の影響に意識を向け、それがもはや異国の音楽とは意識されないほど「J」なポピュラー音楽になっていることの含意を一緒に探求したい。									
授業計画									
ポピュラーミュージック史を学ぶことは、単純に各時代を代表するヒット曲を聴いて、その時代背景を概観することには留まらない。本講義では、20 世紀以降の主だったポピュラー音楽のジャンルであるジャズ、ロック、ワールドミュージック、ダンス音楽を中心に、社会の変遷と音楽の変遷の相互関係を跡づけ、最終的には、現時点でもっとも新しい音楽媒介技術であるインターネットおよびその後の(現在の)ポピュラー音楽のあり方を分析する手だてをみんなで考えてゆきたい。 授業中に扱うテキストを中心にした授業計画は、次のようになる。									
1 洋楽受容史としてのポピュラー音楽史(イントロ) 2 明治から大正へ 3 モボ・モガの時代 4 レコード音楽のオーセンティシティ 5 ジャズの貫戦的熱伝導 6 ビートルズ来日 7 ロックの黎明期 8 日本のロック黎明期 9 ニューミュージックとアメリカ 10 MTV とワールドミュージックと YMO 11 J-Pop と渋谷系 12 東京のストリート・ジェネレーション 13 フジロック、洋邦の対峙 14 J ポップを輸出する 15 ウェブ的音楽生活における洋楽の位置 * 講義内容の補足を目的とし、適宜音響・映像資料を利用する。									
授業外学習の指示(予習・復習・課題等)									
皆それぞれ、関心のあるアーティストやジャンルは異なるだろうから、講義中に紹介する入門書数冊をまずは読み込み、それを手がかりに、自分の関心にそっていろいろな文献を読み、音源を聴き、知識を深めて欲しい。毎回、授業終了 5 分前にその日の授業内容を、日頃聴いている音楽や読んでいる研究書などに照らし合わせてまとめた即興レポートを課す。自分の論旨を短時間で簡潔にまとめる訓練をして欲しい。									
評価方法・評価基準									
履修条件・留意点及び受講生に対する要望									
購入必須テキスト(授業内で配付するプリント類を除く)									
南田勝也編著(2019)『私たちは洋楽とどう向き合ってきたのか～日本ポピュラー音楽の洋楽受容史』花伝社(2000 円+税)									
参考文献・作品等(購入不要:より深く授業内容を理解するための有用資料)									
キース・ニーガス(2004)『ポピュラー音楽理論入門』水声社 その他は授業中に紹介する。									
参考 WEB サイト(サイト名・URL)									

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

科目ナンバリング コード	PGS3215201	授業科目名	世界の音楽文化			開講曜日・講時	木曜 3 限			
担当教員名	辻本 香子		授業区分	週間授業	開講年度	2020 年度	開講学期	前期	授業形態 種別	講義
科目ナンバリングの説明 ページへのリンク	<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering</a>			ディプロマポリシー (DP) の説明ページへのリンク		<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix</a>				
サブタイトル										
いま聴いている音楽は、聴いたことがない音楽へとつながっている										
授業の目的・到達目標										
<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界各地の音楽文化に関心を向け、自分の視野を積極的に広げることができる</li> <li>・音楽をめぐる価値観の多様性について、その背景にある社会や文化との関係から理解できる</li> <li>・自分が知らない音楽についてリサーチし、他の人に向けて自分の言葉で説明できる</li> </ul>										
授業の概要										
<p>今まで知らなかった音楽に出会うとき、私たちはそれをどのように聴き、どのように受け止めているだろうか。また、私たちがつくる・なじんでいる音楽を、自分と異なるバックグラウンドをもつ人々はどのように聴き、受け止めてくれるだろうか。音楽を届けられる範囲が大きく広がっている現在、こうした問いに答えることは、音楽に携わる上で重要である。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの音楽について、自分の言葉で説明する技術を身につける。</p> <p>具体的には、民族音楽学の研究にかかわる方法論の歴史と近年の研究動向をあわせて学びながら、実際に各地域の事例を紹介し、音楽文化とその背景となる社会の状況について考える。授業内では画像・音源や映像の視聴を重視するため、講義に継続して出席することを重視する。今まで知らなかった音楽に出会うとき、私たちはそれをどのように聴き、どのように受け止めているだろうか。また、私たちがつくる・なじんでいる音楽を、自分と異なるバックグラウンドをもつ人々はどのように聴き、受け止めてくれるだろうか。音楽を届けられる範囲が大きく広がっている現在、こうした問いに答えることは、音楽に携わる上で重要である。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの音楽について、自分の言葉で説明する技術を身につける。</p> <p>具体的には、民族音楽学の研究にかかわる方法論の歴史と近年の研究動向をあわせて学びながら、実際に各地域の事例を紹介し、音楽文化とその背景となる社会の状況について考える。授業内では画像・音源や映像の視聴を重視するため、講義に継続して出席することを重視する。</p>										
授業計画										
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「世界の音楽」を学ぶことの意味と意義</li> <li>2. 新しい音の「発見」: 比較音楽学から民族音楽学へ</li> <li>3. 伝わりゆく音楽: 文化の伝播</li> <li>4. フィールドワーク: 民族誌と参与観察</li> <li>5. 記録と保存: 採譜、録音、映像</li> <li>6. どんな音楽にも理論がある</li> <li>7. 楽器の分類と博物館</li> <li>8. 音楽とモノ: 楽器と動物</li> <li>9. 音楽と音のあいだ: うた、ことば、声</li> <li>10. 音の環境、音を聴く身体</li> <li>11. 信仰と音楽、観光と音楽</li> <li>12. 政治と音楽</li> <li>13. 移動する音楽</li> <li>14. 世界音楽、諸民族の音楽: 同時代の音楽文化を考えるために</li> <li>15. 全体のまとめとレポート作成に向けて</li> </ol>										
授業外学習の指示 (予習・復習・課題等)										
<p>関連する参考文献等は講義内で提示するので、関心に応じて読んでおくこと。質問等があれば授業内で受け付ける。また、講義時間内で視聴し切れなかった動画や音源については、各自、図書館やインターネット等を利用して補うのが望ましい。また、演奏会や展示会、旅行などの機会を生かし、積極的に事例に触れてほしい。</p>										
評価方法・評価基準										
履修条件・留意点及び受講生に対する要望										

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

購入必須テキスト(授業内で配付するプリント類を除く)
特になし
参考文献・作品等(購入不要:より深く授業内容を理解するための有用資料)
柘植元一・塚田健一(1999)『はじめての世界音楽—諸民族の伝統音楽からポップスまで』音楽之友社
参考 WEB サイト(サイト名・URL)

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

科目ナンバリング コード	PGS4226101	授業科目名	基礎演習 16 (音楽ビジネス)			開講曜日・講時	水曜 4 限、水曜 5 限		
担当教員名	谷奥 孝司	授業区分	週間授業	開講年度	2020 年度	開講学期	後期	授業形態 種別	演習
科目ナンバリングの説明 ページへのリンク	<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering</a>			ディプロマポリシー (DP) の説明ページへのリンク		<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix</a>			
サブタイトル									
実務的な著作権知識を会得し、エンタテインメント業界での処世術を身につける。									
授業の目的・到達目標									
音楽ビジネスが権利ビジネスであるという基本が理解できる。 音楽を作品から商品として扱うためのコミュニケーションがとることができる。 あるべきプロデューサーをイメージできる。									
授業の概要									
音楽ビジネスの根幹は「著作権」である。 アバウトなイメージで夢を膨らませ見果てぬ夢で終わるか、あざとい業界関係者に騙され、将来を見誤ってしまうことのほうが多いのが現実である。									
その現実に打ち勝っていくために必要なこと 「形のないもの」を伝えつなぐには、表現力と裏づけになる正しい知識とマナーの基本でを身につける。 「温故知新」「不易流行」をテーマにエンタテインメントの偉人などビデオ学習を行い、背景を学ぶ。 著作権の基礎知識から即実践のノウハウを具体的な事例を元に検証し、正しい言葉(用語)を遣いプレゼンができるよう訓練する。									
以上のことを基礎演習に折込み授業を進める。音楽ビジネスの根幹は「著作権」である。 アバウトなイメージで夢を膨らませ見果てぬ夢で終わるか、あざとい業界関係者に騙され、将来を見誤ってしまうことのほうが多いのが現実である。									
その現実に打ち勝っていくために必要なこと 「形のないもの」を伝えつなぐには、表現力と裏づけになる正しい知識とマナーの基本でを身につける。 「温故知新」「不易流行」をテーマにエンタテインメントの偉人などビデオ学習を行い、背景を学ぶ。 著作権の基礎知識から即実践のノウハウを具体的な事例を元に検証し、正しい言葉(用語)を遣いプレゼンができるよう訓練する。									
以上のことを基礎演習に折込み授業を進める。									
授業計画									
第1回	イントロダクション エンタ業界で生きる心構え(知識と人脈)契約とは								
第2回	音楽業界の仕組み								
第3回	著作権の歴史(日本・世界)								
第4回	ビデオ学習 日本のエンタテインメント開祖 「小林一三」								
第5回	ビデオ学習 日本のポップス開祖 「服部良一」								
第6回	ビデオ学習 現在のエンタメビジネスの夜明け 「渡辺晋」「阿久悠」								
第7回	ビデオ学習 メディア 放送業界の仕組み 「ラヂオの時間」								
第8回	著作権の仕組み								
第9回	ビデオ学習 著作権講座 「CRIC 著作権講座 3 部」								
第10回	著作権法スピードラーニング (目的 権利制限 「出版」と「原盤」 業界偽者の見分け方								
第11回	JASRAC の歴史と業務内容(プラーゲ～音楽教室からの使用料徴収) J-WID J-OPAS の使い方								
第12回	楽曲の信託者と利用者 (使用料はいくらになるのか?)								
第13回	現場見学(放送局、FM 局、ライブハウスほか参加人数と日程調整如何で)								
第14回	演習効果、目標達成度測定のためのテスト実施								
第15回	テストの総括をフィードバック								
授業外学習の指示(予習・復習・課題等)									
常に周囲の関心を持ち、読書、音楽・映画などコンテンツにできる限り多く触れ、毎授業時に語れるように準備しておく。 指定教科書で授業の内容を探してくること。 毎授業終了時に、出席カード&ミニレポート提出。(授業内外での疑問・質問)									
評価方法・評価基準									

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

履修条件・留意点及び受講生に対する要望
購入必須テキスト(授業内で配付するプリント類を除く)
「ビジネスパーソンのための 契約の教科書」 福井健策 著 文春新書
参考文献・作品等(購入不要:より深く授業内容を理解するための有用資料)
「よくわかる音楽著作権ビジネス実践篇」 安藤和宏 著 リットーミュージック
参考 WEB サイト(サイト名・URL)
<a href="http://www.cric.or.jp">www.cric.or.jp</a> <a href="http://www.jasrac.or.jp">www.jasrac.or.jp</a>

京都精華大学 2020 年度シラバス (2020/2/3 時点のデータです。ここに掲載されていないデータは 3/2 以降にウェブでご確認ください)

科目ナンバリング コード	PGS3221201	授業科目名	音響技術論			開講曜日・講時	金曜 4 限		
担当教員名	秋吉 康晴	授業区分		開講年度	2020 年度	開講学期	後期	授業形態 種別	講義
科目ナンバリングの説明 ページへのリンク	<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/numbering</a>			ディプロマポリシー (DP) の説明ページへのリンク		<a href="http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix">http://www.kyoto-seika.ac.jp/stu/class/matrix</a>			
サブタイトル									
「音」のテクノロジーからみたポピュラー音楽の表現									
授業の目的・到達目標									
<ul style="list-style-type: none"> <li>・録音技術および電子音響技術の基本原則とその歴史的発展を理解できる</li> <li>・ポピュラー音楽の歴史や現状について、音響技術と関連づけて考察できる</li> <li>・音楽文化を支える音響技術のあり方についてリサーチし、他の人に向けて自分の言葉で説明できる</li> </ul>									
授業の概要									
<p>人類は古来より多彩な音の表現を求めて、実に多様な楽器をつくりだしてきた。それはわたしたちにとって最も身近な声にはじまり、日常的な道具から派生した単純な楽器を経て、職人仕事によってつくられる精巧な楽器へと多様化し、洗練されていった。人類が発展させてきた多様な音楽表現は、そうして生まれた楽器の多様性と、それらがうみだす多彩な音によって支えられてきたと言っても過言ではないだろう。同じことは現代の音楽にもあてはまるが、その音をうみだす手段はかつてあった楽器とは大きくかけ離れたものになっている。20 世紀以降に登場した音楽ジャンルの多くは、かつての「楽器」の枠にはおさまらないようなやり方で、「音」そのものを記録し、増幅し、編集し、あるいは合成するテクノロジーとともに発展してきたのである。本講義ではポピュラー音楽の表現を支えてきたテクノロジーの歴史をふりかえりながら、さまざまな音楽ジャンルにおいて作品の素材としての「音」がどのように扱われてきたのかを概観する。人類は古来より多彩な音の表現を求めて、実に多様な楽器をつくりだしてきた。それはわたしたちにとって最も身近な声にはじまり、日常的な道具から派生した単純な楽器を経て、職人仕事によってつくられる精巧な楽器へと多様化し、洗練されていった。人類が発展させてきた多様な音楽表現は、そうして生まれた楽器の多様性と、それらがうみだす多彩な音によって支えられてきたと言っても過言ではないだろう。同じことは現代の音楽にもあてはまるが、その音をうみだす手段はかつてあった楽器とは大きくかけ離れたものになっている。20 世紀以降に登場した音楽ジャンルの多くは、かつての「楽器」の枠にはおさまらないようなやり方で、「音」そのものを記録し、増幅し、編集し、あるいは合成するテクノロジーとともに発展してきたのである。本講義ではポピュラー音楽の表現を支えてきたテクノロジーの歴史をふりかえりながら、さまざまな音楽ジャンルにおいて作品の素材としての「音」がどのように扱われてきたのかを概観する。</p>									
授業計画									
1 回目 イントロダクション—音楽とテクノロジー 2 回目 楽器の分類 3 回目 録音技術①—録音技術の発明史 4 回目 録音技術②—機械式録音から電気録音へ 5 回目 録音技術③—磁気録音とスタジオ編集の美学 6 回目 録音技術④—DJ の美学と二次創作 7 回目 電気の響き①—電気楽器 8 回目 電気の響き②—電子楽器 9 回目 シンセサイザー①—音響合成の起原 10 回目 シンセサイザー②—電子音楽の発展 11 回目 シーケンサー—演奏の自動化 12 回目 デジタル・サウンド①—デジタル録音の原理 13 回目 デジタル・サウンド②—デジタル音響表現 14 回目 テスト 15 回目 総括									
授業外学習の指示(予習・復習・課題等)									
授業内で提示する文献や関連書籍を読んで参加することを履修者には期待したい。また、講義で紹介できる作品例には限りがあることを踏まえ、各自で録音資料や文献資料を積極的に探してほしい。									
評価方法・評価基準									
履修条件・留意点及び受講生に対する要望									
購入必須テキスト(授業内で配付するプリント類を除く)									
なし									
参考文献・作品等(購入不要:より深く授業内容を理解するための有用資料)									
参考文献・作品等(購入不要:より深く授業内容を理解するための有用資料)は授業時間内に提示する。									
参考 WEB サイト(サイト名・URL)									
授業時間内に提示する。									